



県民健康ビッグデータは、 新潟県の貴重な資源となる。

健やかな未来のために、行政がいま取り組まなければならない課題とは。
シリーズ第4回は新潟県の「ビッグデータプロジェクト」を紹介する。

女優

紺野美沙子さん

新潟県知事

米山隆一さん

紺野 先ほど県職員の方と名刺を交換させていただいたんですが、「医師・看護職員確保対策課」という部署があるんですね。

米山 青森や岩手にも、似たような部署があると思いますよ。

紺野 新潟でも、やはりお医者さんの数が足りない？

米山 そうですね。人口10万人あたりの医師の数は、全国平均がだいたい244人。新潟県は200人で、全国で43番目なんです。新潟市などは医師の数も多いんですが、魚沼になると119人ですから、全国平均の半分ぐらいしかないという状況ですね。

紺野 地域によって偏りが大きいということですね。

米山 なにしろ新潟県は広いのですからね。富山、石川、福井の北陸三県を足したのと同じぐらいの大きさがあります。人口もその三県を足した7、8割ぐらいの規模です。でも、医学部は

新潟大だけ。医大の数が人口に比例しないというのが、医師不足の原因の一つだと思います。**紺野** そういうお医者さんの地域偏在を解消する方法というのはないのでしょうか？

米山 私の持論としては、そろそろ医師の配分を人口割にすべきではないかと思っています。

紺野 人口割？
米山 保険医登録というのがあるのをご存知ですよ。保険医登録した人だけが保険診療できるんです。その保険医登録の数を人口割りにすればいいんです。

紺野 人口何万人のところに何人しか登録できませんよ、と。

米山 そうすると、そこであぶれた人は「じゃあ、他のところに」と動くじゃないですか。アメリカでは、制度自体はちよつと違いますけれど、全体の方向性としてはそういうかたちで申しています。ニューヨークで申

請してダメだったらテキサスに行き、テキサスでダメだったらノースダコダに行き、と。

紺野 なんだかテレビ局のアナウンサー試験と似ていますね（笑）。最初は東京のキー局を目指すんですけど、やはり狭き門ですから、どうしてもアナウンサーになりたいという人は、九州から北海道まで、地方局を転戦していく。

米山 それで、福岡に決まったとしても、別に不幸じゃない。

紺野 そうなんです。お医者さまも、僻地から中央まで、いろいろ経験することで、人間の幅も広がると思いますし、見えないものが見えてくるんじゃないでしょうか。

県立病院が多い。
その特徴を生かして

米山 医師不足は、医師の数を増やせばいいという、単純な問

題ではないんです。安易な定員増は質の低下を招くうえに、社会全体の医療費を増やしてしまうことになります。そうすると国の財政が破綻しかねない。ただ、それについては国政で決めるべきことであって、自治体としては、医師の確保、医師の働く環境の整備など、やるべきことを全部やっていかないとけない。

紺野 新潟県でも新しい取り組みを始められたとか……。
米山 昨年10月、私が知事に就任してから準備を進め、新たにスタートしたのが「県民健康ビッグデータプロジェクト」です。

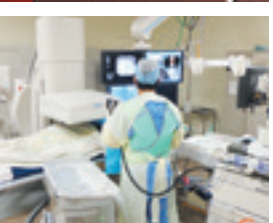
紺野 健康ビッグデータ？
米山 医者が少ないというのも新潟県の特徴ですが、もうひとつ、県立病院が非常に多いというのも特徴なんです。結局、医師不足だから県立病院として維持せざるを得なかったのが実情なんです。13の県立病院と、

県が開設し、公設民営方式で運営する基幹病院を合わせた14病院で県内ほぼ全域をカバーしています。

紺野 他の県では、県立病院ってそんなにないですよね。

米山 ひとつの県に、2、3箇所じゃないでしょうか。それに對して、新潟県では、県立病院が数十万人規模の数をカバーしていることになりました。そこに県民の健康に関する膨大なデータが蓄積されているわけです。**紺野** それを活用しようというわけですね。

米山 医療ってデータ産業なんです。患者さんがこのぐらいの血圧で、この薬を投与したらこ



医療に関わらず、どんな仕事でも、
机上で学べることは少ない。



体験することでしか、医療は学べない。

小・中学生に体験学習を実施する「メディカルコート八戸西病院」。

扉を開けると、何やら違和感があった。小さな医療スタッフがあちらこちらにいる。よく見ると、それは白衣を着た子どもたちだった。そう、ここ青森県八戸市にある『メディカルコート八戸西病院』では、年に一度、小学生たちに医療現場をよく知ってもらうために体験学習を行っている。放射線科では、CTで箱をスキャンし、中に何が入っているかを当てたり、薬剤科では、錠を使って薬の分包などを体験したりする。すべてが楽しくわかりやすく配慮されているのは、子どもたちの笑顔を見れば一目瞭然だ。さらに、患者さんの身の回りの世話やリハビリを体験する“さわやか八戸グッジョブ・ウィーク”に協力し、多くの中学生を病院に受け入れている。まさに未来の医師、看護師などを育



てる場だ。一人の女の子がこう言った。「薬剤師という仕事はよく知らなかったけれど、大きくなったらなりたいです」。体験することで、その仕事を理解し、好きになる。机上の勉強だけでは決して学べないものだろう。夢を育む場所を作ることも地域貢献だ。SGグループの活動がそう語っていた。

その地の、その人と、ともに。

東北医療福祉事業協同組合

青森県八戸市大字河原木字八太郎山10-81 <http://www.sg-kumiai.or.jp>

北越病院 / 二王子温泉クリニック / 八戸在宅クリニック / シルバークリニック / わたのはクリニック

SG GROUP



米山隆一
Ryuichi Yoneyama

昭和42年、新潟県生まれ。東京大学医学部卒業後、独立行政法人放射線医学総合研究所、ハーバード大学附属マサチューセッツ総合病院に勤務。放射線科医として医療の現場で働く。医学博士と同時に弁護士の資格を持つ。平成28年、新潟県知事選に出馬し初当選。知事に就任した。

うなったというようなデータが大量にあるわけです。それをきちんと統計分析することで、重複診療や重複検査、重複投薬を削減することができるし、病院経営の効率化も図れる。それをもっと幅広くやるべきだという意見は昔からあるんですが、病院ごとに独自でやっているから、データ統合がなかなか進まない。**紺野** でも、県立病院ならそれが可能になると。

て、来年から各市町村の国保がすべて県の管轄になるので、県の国保のデータも全部統合する。さらに全国健康保険協会がやっている健康診断のデータも統合する。いままでいろいろなところで散発的にやっていたデータ統合を全県下で統一的にやろうというわけです。これは目新しいアイデアではありません。ただ、これだけの規模でやるというのは、いまだかつてないことで、そういう意味できわめて野心的でかつ先進的な事例になりうらと思っています。**紺野** そのビッグデータベースが出来上がれば、医療費削減だ

けでなく、いろいろな可能性を広げてくれるというわけです。**米山** 医療の研究というのは、結局データの集積の分析なんです。県民230万人のデータベースというのは他県にはないものですし、海外を見てもそれだけの統一的なデータベースはありません。それを活用して研究論文をつくることもできます。**紺野** 研究者としてのキャリアアップを望むなら、まずは新潟で働こうと。

紺野美沙子
Misako Kono

昭和55年、NHK連続テレビ小説『虹を織る』でヒロインを演じる。その後、女優として活躍するかたわら、平成10年には国連開発計画親善大使に任命され、国際協力の分野でも活躍している。平成22年秋から、「紺野美沙子の朗読座」を主宰している。

で見られるようにすれば、自分の健康管理にも役立てることができるはずですが、データベースを匿名化したうえで健康産業、ヘルスケアビジネスに開放し、薬の治験などに活用してもらうということも考えられます。**紺野** まさにデータは貴重な資源なんです。**米山** そうです。そして、データを解析できるシステムが、ここからの産業のインフラになると思います。**紺野** お話をうかがっているだけでも可能性を感じました。今日はどうもありがとうございました。

